

江戸散歩

元禄赤穂事件と伊奈家の本所深川開発



2014.11.16

第3回歴史バスツアー「江戸散歩」資料

A G C新井宿駅と地域まちづくり協議会

はじめに

今回のバスツアーでは江戸の開発に果たした伊奈家の役割を明らかにしようと思いましたが、今の東京に伊奈家の事績を見て取れるものはほとんどありません。そこで伊奈家と関りの深い本所深川を舞台にした赤穂事件の足跡を辿ることで明らかにしようと思いました。実際の現場を歩くことで同時代の様相が明らかになってくると思います。

元禄赤穂事件とは

5代将軍徳川綱吉の御代、元禄14年3月14日、江戸城松の廊下にて赤穂藩主浅野内匠頭長矩が突然、高家旗本の吉良上野介義央を斬りつけました。原因は吉良の傲慢な態度に堪えかねたとか、吉良に賄賂を贈らなかったことで虐めを受けたことに対する恨みとか、もともと内匠頭は癩癪持ちだったとか諸説あります。殿中での刃傷、しかもこの日は綱吉の母桂昌院に朝廷から官位を授ける大事な日とあって綱吉は激怒。浅野内匠頭に即日切腹を申し渡しました。吉良は手向かいしなかったことが殊勝とされ御咎めなしでした。

赤穂藩は断絶、ほどなく赤穂城も明け渡され、浪士となった旧赤穂藩士は主君の仇を討つため復讐を決意。元禄15年12月14日、本所の吉良邸に討ち入った四十七士は吉良上野介の首を挙げ、主君の眠る泉岳寺への凱旋を果たしました。年が明けて2月4日。義士達は全員切腹を申し渡されますが、同日、吉良家も改易され2年に及ぶ復仇劇は幕を閉じました。

赤穂事件と伊奈家関連年表			
元号	西暦	赤穂事件	伊奈家の本所深川開発
寛永4年	1627		忠治(第3代)深川獵師町を開発
承応3年	1654		赤堀川通水に成功。利根川が太平洋に流れる。 江戸・北関東・東北を繋ぐ水上輸送網の完成。 氾濫がなくなったことで隅田川以東の開拓が可能に。
明暦3年	1657		明暦の大火。常盤橋御門の役宅消失。馬喰町に移転。
万治2年	1659		両国橋の架橋。本所深川地区の市街地化が指向される
万治3年	1660		葛西用水を開削。隅田川以東の新田開発が進む
寛文4年	1664	米沢藩第3代藩主上杉綱勝急死。 嗣子断絶回避のため吉良上野介義央の長男 を養子に迎え、第4代藩主に。三之助(綱憲) 1歳	上杉家の後継ぎが藩主指名でなかったためペナルティ として米沢藩30万石の内伊達郡、信夫郡(12万石)を 没収する。伊奈忠克(第4代)代官として赴任。年貢米 回漕のため商人渡辺友意に阿武隈川航路を開削させる。
延宝3年	1675		本所上水の整備
元禄3年	1690	上杉綱憲、次男春千代を父吉良義央の養子 にする。(吉良義周)	
元禄10年	1697		洲崎付近の埋立てを行う
元禄11年	1698	9/6、勅額火事。鍛冶橋の吉良邸消失。呉服橋 に移転。浅野長矩(内匠頭)大名火消しとし て消火の指揮を執る。	8月、伊奈忠順(第7代)寛永寺根本中堂の余材をもって 永代橋を架橋する。 洲崎土手(防波堤)の築造
元禄13年	1700		深川の埋立て工事を奉行する
元禄14年	1701	3/14松の廊下事件。吉良上野介、浅野内匠頭 に斬りつけられる。同日、内匠頭切腹。 赤穂藩は断絶。	貯木場を深川に移転。現在の木場公園
元禄15年	1702	2月、円山会議。浅野内匠頭の弟、大学(長広) の処分が決まるまで討ち入りはしないと決定。 7月、浅野大学(長広)浅野本家にお預けとなる。 浅野家再興の道断たれ、討ち入りを決意。	
		12/14 吉良邸討ち入り。赤穂浪士吉良上野 介の首をっかけ泉岳寺に凱旋。	
元禄16年	1703	2/4 赤穂浪士全員切腹。同日吉良家は改易。 吉良義周は信州諏訪藩にお預け	
宝永元年	1704	上杉家4代藩主綱憲(吉良義央長男)死去42歳	関東大洪水。本所堤防を修築。
宝永3年	1706	吉良義周、諏訪藩で病死。21歳	
正徳年間	1711-16		深川の開発地、順次市街地に編入。町奉行などに移管

寛永寺根本中堂



東叡山寛永寺は元和2年（1628年）2代将軍秀忠が幕府のブレーンだった天台宗の僧、天海に上野の山を丸ごと寄進したのが始まりとされています。根本中堂は元禄11年（1698年）完成しました。寛永寺は上野公園はもとよりその周辺にも堂宇伽藍が立ち並び、徳川家の菩提寺として相応しい威容を誇っていました（30万坪）。残念ながら幕末の彰義隊戦争（1868年）で大半が焼失してしまい、この根本中堂も明治初期に川越の喜多院の本地堂が移築されたもので当時のものではありません。これがなぜ、忠臣蔵、ひいては伊奈家と関係あるかという、この根本中堂にまつわる大火が関わっています。

元禄11年（1698年）9月6日。新橋南鍋町から出火し、強い南風のため遠く北方の千住まで延焼，大名屋敷83，旗本屋敷225，寺院232，町屋1万8703戸，326町を焼き死者3000人を出しました。この日、寛永寺根本中堂が落成して，東山天皇からの勅額が江戸に入ってきたことにちなみ，

中堂火事、勅額火事（ちよくがくかじ）とも呼ばれています。じつはこの火事で吉良上野介義央は鍛冶橋の屋敷を焼失し、赤穂藩主浅野内匠頭長矩（あさのたくみのかみながのり）は大名火消として消防の指揮をとっていました。松の廊下の刃傷事件はその3年後に起こります。ちなみにこの根本中堂の建設とこの火事で大儲けしたのが材木商の紀伊国屋文左衛門でその額50万両（約500億円）だったそうです。すごいですね。

そして伊奈家ですが、じつはこの根本中堂の余材をもって隅田川に永代橋を掛けました。紀文が巨額を儲けてなおかつ余材で110間（200m）の橋が架けられるんですから当時の根本中堂の規模の大きさがわかります。

そして橋の完成の4年後に、この橋を赤穂浪士たちが吉良の首を掲げて渡ることになります。この根本中堂と大火は忠臣蔵の人々を含めいろんな人の運命に微妙に影響を与えています。

徳川家基

じつは寛永寺と伊奈家にはもう一つ繋がりがあります。徳川家基とはあまり知る人はいないと思いますが、幻の11代将軍と言われている人です。この人は10代将軍家治と側室のお知保の方との間の生れた嫡男で、文武両道、聡明活発で吉宗以来の名君になると囑望されていました。しかし、安永8年（1779）2月24日、鷹狩の帰りに寄った品川の寺で出された茶を飲んだ後

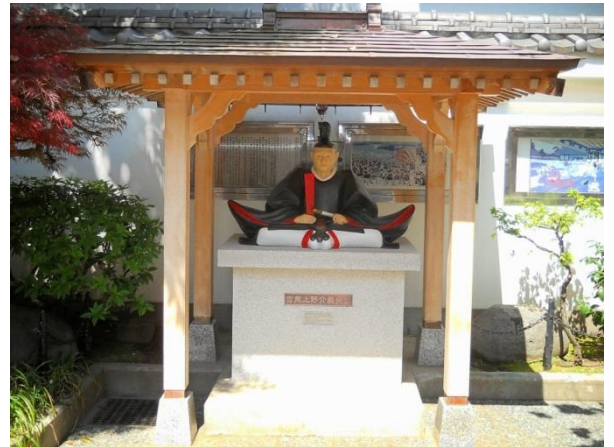
に突如体調不良になり、そのまま亡くなってしまいました。享年１８歳でした。

これには次期将軍となった家斉の父、一ツ橋治斉に毒殺されたなどと噂があります。家基は将軍以外では異例ともいえる扱いで寛永寺の徳川家霊廟に祀られました。また、生母のお知保の方は死後３０年経ってからですが従三位が追贈されています。これも将軍の生母にならなかった側室にしては異例中の異例です。それだけ家基は期待されていたのであり、家基の代りに将軍となった家斉が気にしていたと言われています。

お知保の方は実は伊奈忠宥（１０代）の養女でした。養女であったいきさは不明ですが寛延２年（１７４９）１３歳の時に大奥入りをします。そして２６歳で家基を生み、寛政３年（１７９１）に５５歳でなくなります。もしも家基がそのまま将軍となれば忠宥は将軍の外祖父となり伊奈家の立場は著しく強化されていたであろうことが想像されます。

伊奈家が改易されて３年後の寛政７年２月。寛永寺にて家基の１７回忌法要が行われた際、鳩ヶ谷宿八郎兵衛を筆頭にかつての伊奈支配下の舎人領、平柳領、戸田領２１か村が伊奈忠善の赦免願いを寛永寺の役僧を通じて出しています。徳川家基、お知保の方、伊奈家のつながりが支配下の百姓達にもよく知られていたことがうかがえるエピソードです。

本所吉良邸



本所松坂公園（吉良邸跡）。地元町会有志が広大な吉良邸の一面を公園とし都に寄付したもの。海鼠堀（なまこべい）を模した壁の中には吉良義央の座像や井戸があります。

もともと吉良は鍛冶橋に屋敷を構えていましたが、先の勅額火事で焼失すると呉服橋に屋敷を再建しました。ところが3年後の元禄14年（1701年）3月14日の松の廊下刃傷事件で浅野家が断絶すると、吉良に恨みを持つ赤穂浪士たちが襲撃するとの噂が立ちました。同年8月19日、なぜか幕府は吉良に本所に移転を命じます。本所の屋敷は旗本の松平信望（のぶもち）という人が住んでいましたがそれをわざわざ移転させて吉良をそこに移しています。刃傷事件で浅野内匠頭が即日切腹、吉良にお咎めがなかったことから、片手落ちではないのか？という批判があり、この頃から幕府の吉良に対する態度が冷たくなっているのがわかります。結局吉良はここで襲撃されますが、江戸城の目の前にある鍛冶橋や呉服橋にあったら討ち入りはかなり難しかったし、それこそ将軍に弓引く輩として浪士達は討伐されていたと思い

ます。ちなみに吉良邸のすぐそばには関東郡代の牢屋敷（本所牢屋敷）があり、伊奈家の家臣が詰めていました。

隅田川から江戸川の間の本所・深川地域は伊奈氏の利根川東遷が始まるまでは利根川の支流が乱流する低湿地帯で水害の多い寒村でした。しかし利根川が東遷し、武蔵国東部の河川が整理されると干拓がしやすくなり市街地化する条件が整ってきました。3代伊奈忠治のころ深川獺師町を開発し以後南へ東へと開発され明暦の大火以降の江戸の防災の町割りや拡大する人口の重要な受け皿になっていきました。開発された市街地は本所奉行や町奉行に移管されますが、それ以外の地域は伊奈家の支配でした。

明暦の大火

明暦3年（1657年）の大火＊振袖火事は江戸府内を焼き尽くされ10万人に及ぶ死者を出しました。幕府の対応は迅速で、被災者の救済、米価の安定などの的確な措置を取っています。そしてこれを期に幕府は防災を重点にした江戸の街の再編に取り組みます。道路の拡張、火除け地の設定、寺社の郊外への移転、武家屋敷の再編、新開地の開発、特に深川地域の埋め立て市街地化に重点が置かれました。また、おびただしい死者を出したのは幕府が防衛上の理由から隅田川に橋を掛けなかったため避難民が逃げ場を失ったことにあつたので寛文元年（1661年）に両国橋を掛けました。これらの一連の大改造は、それまで無秩序に拡大してきた江戸の町を一新するものでし

た。それ以後も江戸は何度も大火に見舞われますが、明暦の大火のような大量の死者が出ることはありませんでした。特筆すべき施策です。



両国橋。橋を渡ると馬喰町の関東郡代の屋敷があった。

吉良家と上杉家

赤穂浪士たちは吉良を打ち取った後、すぐそばの回向院で休息を取る予定でしたが、回向院は関わり合いになるのを恐れて門を開けませんでした。仕方なく両国橋の東詰で休息を取りながら上杉家の討手を待ちましたが、来る様子はありません。吉良邸跡にある説明版には旗本の服部彦七という人がここで浪士たちが橋を渡ることを役目上拒否したとありますが。どうやら大石は最初から両国橋を渡るつもりはなかったようです。というのは毎月1日と15日は大名・旗本の登城日になっていて、この両国橋を渡ると登城をする大名等とのトラブルになる可能性があると考えていたからです。泉岳寺の主君の墓前に吉良の首を供える前に無用なもめごととは避けなければならないのです。最も安全な移動手段は船ですが、結局歩いて泉岳寺に向かいます。そ

のまま隅田川を渡らず南下すれば永代橋があります。先に言ったように永代橋は元禄11年（1698年）に伊奈半左衛門忠順（7代）が架橋しました。この新しい橋が架かっていなければ赤穂浪士たちはかなりのリスクを冒して泉岳寺に向かわなければならなかったはずです。

ひとつ疑問に思うのは吉良上野介の息子が藩主を務める上杉家がなぜ討手を差し向けなかったか？ということです。上杉家と言えば藩祖謙信以来武門の誉れ高き家柄。藩主の父が討たれて何もしなかったとなればご先祖の誇りも地に落ちるというところですが、実際にはもともと準備している間に幕府から出兵禁止の使者が来てそれに従いました。そこにはあまり積極性が見られません。それには以下のような事情がありました。

寛文4年（1664年）米沢藩第3代藩主上杉綱勝は跡継ぎがないまま急死します。当時は嗣子断絶の大名は改易（お取り潰し）になりますが、このときは保科正之（3代将軍家光の異母弟）の斡旋により綱勝の妹の夫である吉良上野介義央の生まれたばかりの長男三之介（4代上杉綱憲）を末期養子（急に願い出る養子。お家断絶回避の緊急避難的措置）にして改易を免れました。上杉家にとって吉良は恩人になりますが、その関係は良好ではありませんでした。というのも吉良家の普請や買掛金を負担させられたり毎年6,000石もの財政支援をさせられたからです。米沢藩の重臣たちはこのままでは吉良家に乗っ取られると嘆いていたそうです。ただでさえ末期養子のペ

ナルティとして30万石の領地の半分に幕府に没収されたので藩の財政は急速に悪化していきました。討ち入り後の対応に関しては、幕府の命令に従うしかないのですが、武勇を誇る上杉家にしては少々手際が悪いように感じます。幕府の使者が来る前に少数でも急派して戦端を開いてしまうということもできたと思います。みすみす首を取られて泉岳寺まで凱旋を許すということが侮りの対象になることがわかっていたはずですが、やはり上杉家の、特に重臣たちは吉良に対して冷めたものがあつたと思います。

上杉藩領を接收した伊奈忠克

上杉家が領地の半分の15万石を没収されたとき、その大半の12万石に当たる伊達郡信夫郡（福島県）を接收したのが伊奈忠克（ただかつ第4代）です。伊奈家頌徳碑には「寛文四年（1664年）伊達・信夫両郡の監吏に兼補せられ、憲条（法律を）定め、賦役（労）を省き民その恵蒙る。」とあります。お役目とはいえ上杉家を気の毒に思ったことでしょう。ちなみにこの伊達郡信夫郡は忠克が代官の時代に江戸の豪商渡辺友意（わたなべとももち）に阿武隈川を開削させて遠く宮城県の荒浜まで舟路を開き、太平洋を南下して、銚子沖から利根川を通して江戸まで運ぶ年貢米の航路を開発させています。また、この二郡が天領になってから幕府は養蚕を奨励し、この地方は生糸の一大産地になりました。初代忠次（ただつぐ）が結城紬を再興したようにここにも伊奈家が絡んでいるかもしれませんね。



吉良邸から泉岳寺までの道のり（東京時代MAP江戸編—光村推古書院）

永代橋

永代橋の側にはちくま味噌という会社があり、その前に石碑があり、以下のように書かれています。

「赤穂四十七士の一人大高五子葉は 俳人としても有名であります、ちくま味噌初代竹口作兵衛木浄とは其角 の門下として俳界の友でありました。

元禄十五年十二月十四日討入本懐を 遂げた義士達が、永代橋へ差し掛るや、あたかも当所乳熊屋味噌店上棟の 日に当り、作兵衛は一同を店に招き入れ甘酒粥を振る舞い労を犒らったのであります。大高源五は棟木に由来を認め、又看板を書き残し泉岳寺へ引き上げて行ったのであります。」

昭和三十八年二月 ちくま味噌十六代 竹口作兵衛識



ちくま味噌の赤穂浪士休息の碑

ちくま味噌の初代竹口作兵衛と四十七士の一人大高源吾は俳人宝井其角（たからいきかく）の門人でした。源吾は江戸では町人脇屋新兵衛を名乗っていたので、作兵衛は吉良邸討ち入りも四十七士に源吾がいることも知らなかったはず。一行の中に源吾を見つけた時は驚いたでしょうね。義士達は朝日の

中をまだ新しいこの橋を渡っていきました。



永代橋（元禄11年、1698年伊奈忠順が架橋）



永代橋から見る絶景。長さ110間（200m）幅3間余（6m）は当時最大級の橋。隅田川河口にあり、多数の船が通過するので満潮時でも3メートルの高さがありました。「西に富士、北に筑波、南に箱根、東に安房上総」と称されるほど見晴らしの良い場所であったと記録（『武江図説』）に残る。（ウィキペディア）映っているのは佃島の大川端リバーシティ21。

伊奈家の本所・深川開発

なぜ伊奈忠順に永代橋の架橋を命じられたかというと、伊奈家は代々深川の開発を指導してきたからです。江戸東京博物館が発行する「えど友」には以下のように書いてあります。

「伊奈家は深川については永代橋の架橋、深川漁師町の起立、木場町の設

置、その他の多くの町々の起立、そして葛西用水の開削による新田開発等深川地区の形成・基盤整備についての指導的立場にありました。深川地区の開拓、新田開発を実際に担当したのは農民あるいは商人でしたが、その指導および管理を行ったのは関東郡代である伊奈家でした。」

「また江戸の人口急増により江戸市街が急速に膨張し市街地の拡張が望まれてきて、明暦大火以降隅田川以东の本所・深川地区の開拓事業が本格化し、関東郡代である伊奈家の土木技術が駆使され開発が急速に進展し町の造成、新田開発が進んでいきました。」

「伊奈家三代忠治により狝師町の開発がスタート、以後歴代の後継者が関東郡代としてその任に当りましたが、七代半左衛門忠順、八代半左衛門忠ただ達みち、十代忠宥の時代（元禄から明和の頃）が深川開発のピークであり、等」

（江戸東京博物館「えど友」NO 6 4 より）

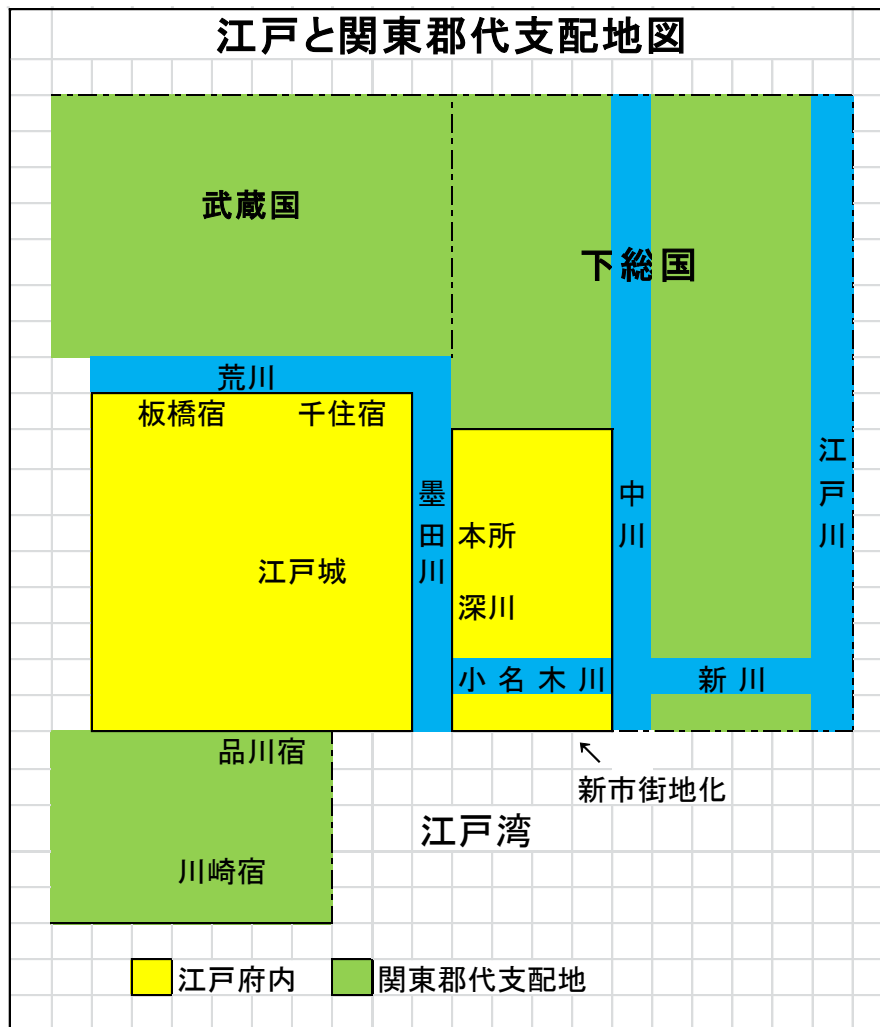


富岡八幡宮にある伊奈忠宥（第10代）が奉納した対の灯籠。赤穂浪士たちも討ち入り前の12月2日、頼母子講と称して八幡前の茶屋に集合し、最後の打ち合わせを行った。

もともと隅田川の東側、葛飾郡は関東郡代の支配地でしたが、江戸が拡大するにつれて開発が望まれました。そこで幕府は開発された土地を町地、寺社地、武家地にして区画し関東郡代支配から町奉行などの管轄に移しました。永代橋の架橋はこの一環でした。この永代橋をはじめ、伊奈家の深川屋敷、富岡八幡宮の灯籠、玄信寺（伊奈忠順の前妻と伊奈忠達（第8代）の墓がある）などがあり、つながりの深さを知ることができます。

江戸と関東郡代支配地の関係

次のページの図を見ればわかりますが、関東郡代伊奈家の支配地は江戸をコの字型に囲んでいます。また、五街道の最初の宿場、板橋宿、千住宿、品川宿など江戸周辺の重要な宿場を支配していたのも伊奈家です。このように伊奈家は江戸を守るように支配地が配され、関東一帯の河川、街道、さらに将軍・御三家の鷹場を職掌していました。伊奈家が幕府内でもいかに重要な役割を担っていたかがわかります。これが世襲されていたのですから異質な存在だったのです。



泉岳寺

永代橋を渡り泉岳寺に向かう途中、大石は吉田兼亮・富森正因の両名を、討ち入りの口上書の写しを持って大目付（大名を監視する機関）仙石久尚のもとに出頭させました。また、泉岳寺に着くまでに唯一足輕の身分で参加した寺坂吉右衛門（池宮彰一郎の最後の忠臣蔵の主人公）が姿を消しています。これには諸説ありますが、内匠頭（たくみのかみ）の妻瑤泉院や広島に蟄居している内匠頭の弟の浅野大学に報告させるために大石が命じたというのが

有力です。大石らが「寺坂は輕輩（身分が低いこと）なので構うことはない。」とか「不屈き者である」と語っているのは寺坂に幕府の追手が掛からないようにするための配慮です。寺坂が広島に行ったことは確認されています。

泉岳寺は曹洞宗のお寺で、浅野家の菩提寺。浅野家との縁は寛永18年（1641年）の大火で外桜田にあった寺院が焼失し、その時に徳川家光の命で毛利、浅野、朽木、丹羽、水谷の5大名が高輪に再建したのが始まりです。浅野内匠頭、瑤泉院、赤穂浪士達が眠っています。



泉岳寺と四十七士の墓 写真は2月に行った時のもの

浪士たちは浅野内匠頭の墓前に上野介の首を供えると討ち入りの報告をし、一人ずつ焼香しました。その後寺から粥のもてなしを受け幕府からの使者を待ちます。



赤穂義士記念館。義士達の遺品や書簡、向かいには義士木像館があります。驚いたことに泉岳寺から吉良の首を受け取った吉良家家老の領収書があります。右は大石内蔵助良雄の像。討ち入りの連判状を手にしている。

義士達は午後6時頃大目付仙石伯耆守の屋敷に移され、松平隠岐守、毛利甲斐守、水野監物、細川越中守の屋敷にそれぞれ預けられ、義士として厚遇を受けています。そして翌年元禄16年（1703年）2月4日に切腹を命じられ、それを従容として受け入れています。同日吉良家は領地召し上げとなり上野介の養子義周（よしちか）は信州に配流となりました。ここに2年に渡る復仇の物語は終わりました。浪士たちの遺骸はこの泉岳寺に埋葬されています。

伊奈家と品川宿（こぼれ話）

泉岳寺の南は品川宿で品川は伊奈家の支配地だったのでいくつか逸話があります。品川宿は東海道の江戸への出入り口で遊里としても有名で、1764年に特別に許可されて500人の遊女を置くことを許可されました。宿場としてはそれまで再三増員の願いを出していたのでこのことに大変感謝しま

した。そこで品川宿では8月7日にその決定をした道中奉行（五街道を取り締まる役人）の安藤弾正惟要（あんどうだんじょうこれとし）を描いた掛け軸をかけ、酒と赤飯を供えました。これを「弾正日待」と言います。そしてこの掛け軸には安藤の他に勘定頭と代官の名前も記されています。その代官というのが伊奈忠宥（第10代）です。品川の遊女増員の決定には伊奈家も関わっていたというのは意外ですね。

また、伊奈忠達（第8代）の時にはこの品川で天一坊事件を裁いています。大岡政談で有名な天一坊事件ですが、そのモデルとなったのはこの事件です。忠達は時間をかけて慎重に取り調べて天一坊が将軍吉宗の御落胤というウソを暴き、この事件を解決しています。

それにしても関東郡代が道中奉行や町奉行など他の役所と職掌がかなり被っていたのですね。後年町奉行などと対立した経緯もこの広すぎる職掌が理由の一つだったと思います。

以上です。

2014.11.16

A G C 新井宿駅と地域まちづくり協議会